
トールの直行

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トールの直行

【Nコード】

N9467Y

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

トールとカルト、二人の主人公が織り成す異世界ものファンタジー。毎日更新予定。

1話

神人、それはこの世界アムステルスで最も強大な力を持つ二つの種族を指す。一つは人型の赤い毛の虎「赤虎」。もう一つは人型の黄色い鱗を持つ龍「黄龍」。

この二つの種族は常にお互いを敵視し闘争を繰り返してきた。それは永年変わらないだろう。この争いに終止符をうつのは全身黄金色の毛を持つ赤虎である。

十

城内の広々としたホールは騒然となった。至る所から喧騒が聞こえる。人々が恐れ慌て逃げ惑っているのだ。

豪華なテーブルや椅子、調度品や豪華な食べ物が入り交じり散乱しドレスアップした男女は遁走する。豪華な金色の絨毯は食材の汁で偏食している所までである。希代の怪物アグマは鉄製のハンマーでしばいても平然としてそんな分厚い窓を突き破り城に侵入してきた。彼は人型で全身緑色の肌をしていて額からは白い一本の角が生えている。服は着ていないし体格も大きい。

アグマの視線は真つすぐに中肉中背でとげとげの赤い髪をし赤い瞳のトールを睨み据えている。激しい殺気を全身からほとばしながら。ずんずん早足で進むアグマ。険のある表情をしている。トールは城に招かれたクラトに連れられてこのパーティー会場に来ていたのだ。モンスターの総称はノルテ。ノルテの中でも強大な力を持つのが人型だ。その中でも危険度が非常に高い一人がアグマだった。

2話

アグマは慌てる賓客達を無視しながら憤怒な表情で述べた。

「邪魔さえしなければお前達にはなにもせん」

アグマは遮蔽物となった立派な椅子を蹴り飛ばしテーブルは腕で投げ飛ばしながら歩度を上げ歩く。突出したノルテである彼は立ち向かってくる槍を持った兵士達を手刀で切り殺していく。

ある者は首を切断され、またある者は胸を貫かれ黄泉の客へと変貌を遂げていく。兵士達の身につけている鎧等は布切れの如く裂け、破壊されていた。恐怖で足が竦み上がり動けなくなったトールは尻餅ついている。

彼は恐怖から声すら出ない。アグマは乱入してくる兵士達をあしらいつつ着実にトールに接近してきていた。トールの傍らにはスミレとカルトが居る。スミレは肩までの黒髪、陶器のような白い肌に大きな瞳を持った美少女だ。そんな彼女と並んで立つのがカルトである。彼は整った容貌で銀髪を背中辺りまで伸ばしゴムで結っている美少年である。

カルトとスミレが一緒にいるとまるで絵画を見ているようだ。二人共トールを引っ張ったり抱き起こそうとしている。しかし余り猶予は無い。子供三人にとっては凄まじい脅威となる怪物が近づきつつあるのだ。

彼等を庇うように前に立つボサボサの金髪に青い瞳、少し小しわのある顔のクラト・ローバイスは腰にはいた剣を抜いた。

3話

悲鳴や叫び声がこだまする大型のホール。そこではなだれ込んで来た兵士達と逃走する賓客や王族、貴族達で溢れていた。アグマは緑色の肌の顔に憎しみを表しながら

「邪魔だ！」

アグマは鎧を着込んだ歩兵三人を一瞬で血祭りにあげた。一人の陸兵の槍がアグマの肩に刺さる。

しかしアグマは平然とその槍を引き抜き二つにへし折った。それからも一人、二人、十人、三十人と精兵を殺戮した。もう戦おうとする衛兵は居ない。

圧倒的な強さを目の当たりにして敗走してしまったのだ。

「お前も邪魔だてするのか？ その赤虎の臭いがする小僧を差し出せ。それなら命は助けてやろう」

アグマは緑色の口角を上げシニカルに微かに笑いながら喋った。それに両手で剣を構えるクラトは答える。

「教え子を守るのは先生である僕の責務だ。その要求は飲めない」

クラトの後方でトールは赤髪を小刻みに揺らし震えている。アグマの目はトールを見据えている。トールはまるで蛇に睨まれ蛙のように身動きがとれない。

彼は十何年という短い人生の中でこの瞬間、瞬間に最も恐怖を感じ取っていた。生きた心地がしない。頼りになるのは孤児院から引き取ってくれた恩師のクラトだけだ。

4話

アグマはゾツとするような笑みを零し

「そんなに死にたいなら……屠ってやろう！」

重心をやや前にし疾駆するアグマ。彼からはまがましい気配が発散されていた。それに対抗する為にクラトはあれ放題の金髪を靡かせ剣を下段に構えながら駆け出した。そして魔腕を発動させる。

魔腕とは筋肉を増強し力を上げる技だ。彼の腕が膨らむ。クラトは縦切りを繰り返すがアグマはそれを右手で握った。クラトの剣を赤い血が伝う。アグマは己の優位を確信しツールを人差し指で指差しながら言葉を紡いだ。

「お前の力量は理解した。まだ伸びしろもある。その赤髪のカギを差し出せ。これは要求では無い、命令だ」

クラトは歴戦の猛者だ。相手の力量を理解できないほど愚かではない。しかし逃げるわけにもいかなかった。

自分にとって最も大切なものをみすみす失うのは耐えられない。彼は教え子のためなら命を捨てる覚悟があった。死んでも守りきるとクラトは心の中で呟いた。彼にアグマの強力な圧力が加わり顔中から汗を流す。アグマはノルテの中で自分が最強だと自負していた。多岐に渡る理由から同族と死闘を展開したこともあった。しかし一度も敗北をきつすることは無かった。全て圧勝で面白みに欠けているとアグマは内心つまらなく思っている。

5話

クラトとアグマはひとしきり睥睨しあった。お互いひくつもりない。激突は避けられないようだ。これから命を賭けた死闘が繰り広げられる。敗北はすなわち死だ。そのうえクラトが負けるとトールの命の灯もあえなく消えてしまう。

教え子のため敗戦が色濃い勝負に打って出る。少なくともこの強靱なノルテを逃走かあるいは深手を負けさせなければならぬと頭で考えるクラト。クラトは剣に力を込め述べた。

「魔腕十割！」

そう発した者の腕が元のサイズの二倍ぐらいに膨れ上がる。彼の腕の部分の服が引きちぎれた。クラトは全力を挙げアグマに仕掛けた。

クラトの剣がアグマの緑色の指を切断し自由になる。アグマは顔をしかめた。ノルテにも痛みはあるようだ。美少年のカルトはそれを見て安心した表情をした。

勝てると思ったのだろう。クラトは剣を縦に振るう。アグマはそれを再生させた右手で防ぐ。重い一撃のためアグマの足が石の床に食い込む程だ。彼は楽しそうに笑っていた。バトルに喜びを感じているのかもしれない。

幾度もの戦いで洗練されたアグマは実力でクラトを上回っていた。そのため余裕のある尊大な態度を崩さない。クラトは現状を打破出来る手段を思案する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467y/>

トールの直行

2011年12月2日10時45分発行